

# 戦前期（大正期～昭和初期）における 西表島の織物（聞き書き）

與那嶺 一 子

## はじめに

沖縄には伝統的に続く特徴的な織物が数多くあり、その多様性についてはクローズアップされてよく紹介されている。しかし、特殊な例ではなく、産業ベースに乗らず、普段行っていた糸作りや染め、織りといった作業については見失われがちである。

今回の調査では、戦前期における西表島の織物について、その素材、染材、織りの道具などを中心に聞き取りを行った。西表島の東部（星立、祖納）と西部（古見）では織物状況も異なっており、島が長く二つに別れていた歴史を示してくれた。話者は明治末から大正生まれで、戦前期の様子を聞き書きというかたちで報告する。

## 西表島の織物の概要

首里王府時代の記録（註1）を見ると、貢布として、苧麻（上布）、芭蕉、木綿の織物があったこと、藍染が行われていたことなどが分かる。

明治に入り貢布の制度が解かれた後については、殆ど記録が無い。今回の聞き取りから戦前期まで苧麻と芭蕉から糸を取り、布とする作業は続けられていたことが分かった。また、東部には炭坑があり、手軽に布を買い求められる状況があった。明治生まれの話者の母親が織物をしていた頃（大正期）あたりから、東部では織物をする人が少なくなっていたと思われる。また、高機の導入は戦後になる。現在は、石垣金星、昭子夫妻による西表の素材を生かした新しい織物がある。一方西部では、同じ頃、上布、芭蕉などが織られ、戦前（大正期か）に高機が竹富島から普及している。古見の集落では今でも芭蕉や苧麻の糸作りが何人かによって行われている。

布が現在のように買う物となる以前は、各地域で自家用あるいは換金用に織られていたはずであり、今回の調査からも自家用に布を織っていた戦前期の様子が理解できた。

今回、快く調査をお引き受け下さった西表島の話者の皆様と石垣夫妻に誌面をかりてお礼申しあげる。

## 凡例

- 聞き取りは質問形式で行われたが、忠実な逐語的再現は行わず、整序の手続きを加えながら、問わず語りの形に構成した。
- 文体は各々の語り手の口調に合わせた。方言語彙または民俗語彙として扱った言葉には、原則として表音的な仮名標記を施した。
- 語り手の方々の芳名には敬称を略した。集落名は本人が現在居住している所である。
- 聞き取り調査は、1998年8月19日、20日、2000年3月7日に行われた。

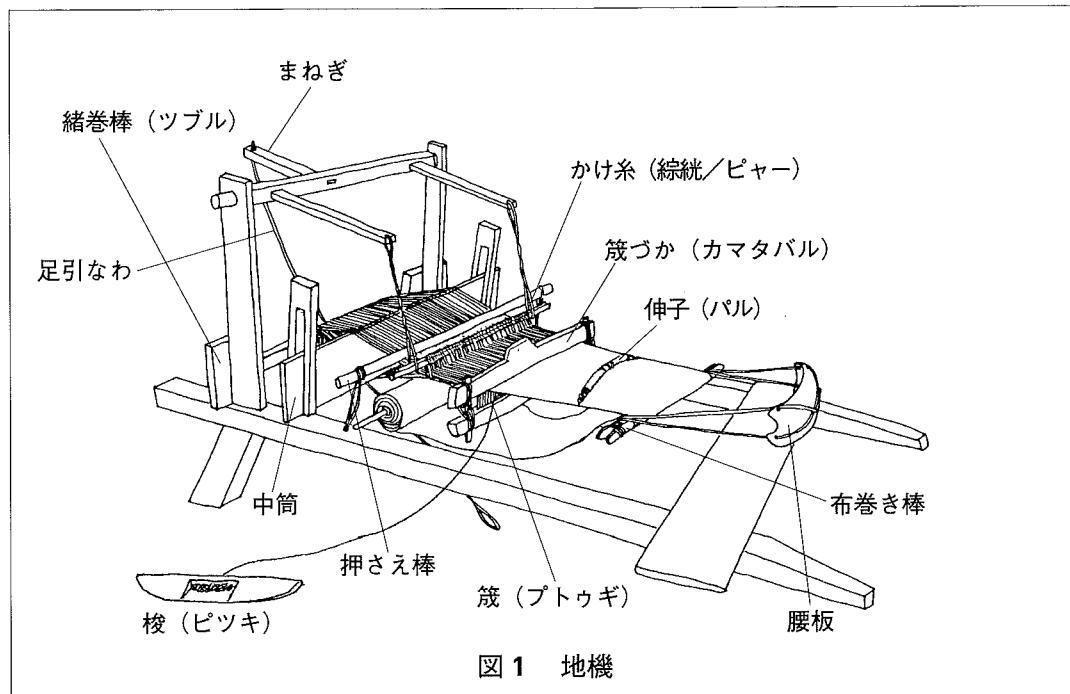


図1 地機

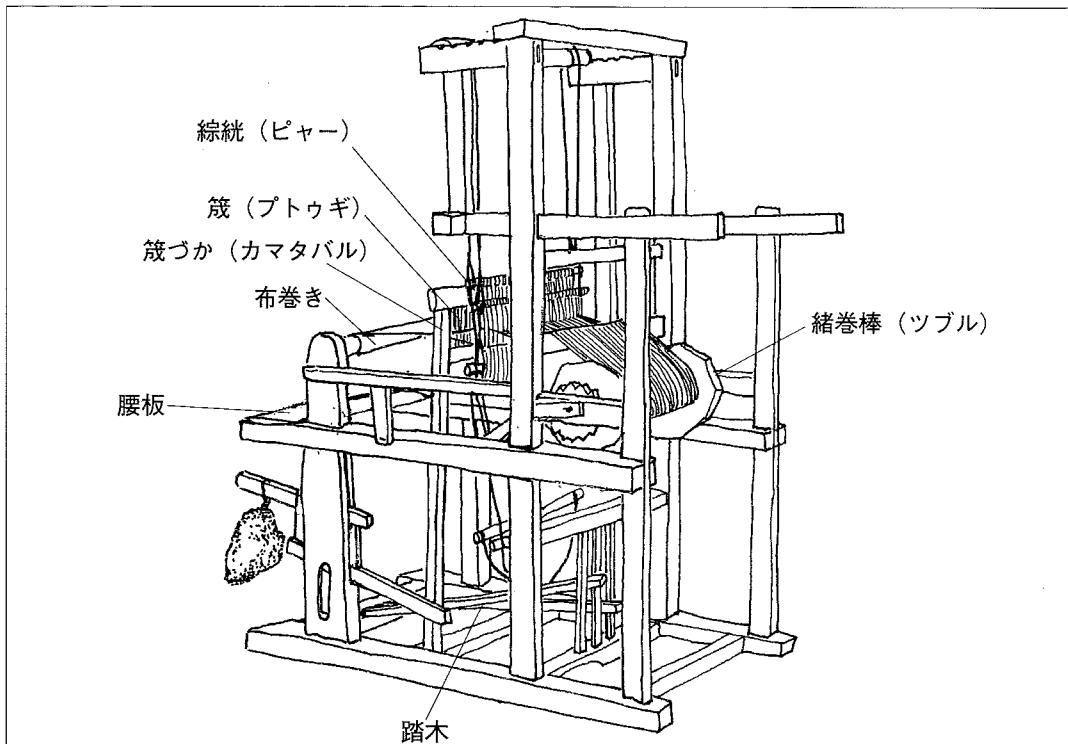


図2 高機A

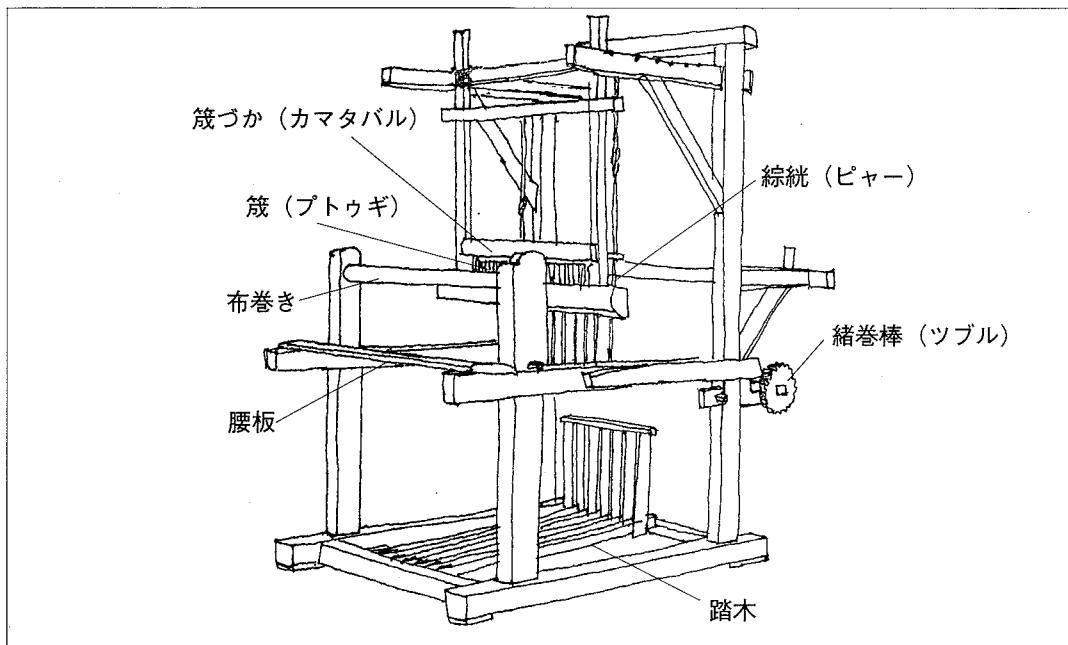


図3 高機B

### 聞き書き 1 (新城寛好：大正11年／星立)

星立で生まれて、星立て育ちました。

母親がちょっと機織りをしていました。芭蕉（註2）を織っていたんじゃないかな。母親の名前はナヘマ、明治28年か29年生まれだったと思います。

木綿もやったんじゃないかなと思います。木綿の紡ぎガナでやったものが、母が亡くなつた後で残っていました。

芭蕉は、自生のを採っていたんでないですかね。自分の畑じゃなくてですね。

木綿の畑はちょっと覚えていないですね。巻いたのはあったけれど、買って来たかどうか分からぬですよ。買って来たとしたら、やっぱり石垣じゃないですか。そう言えば、昔、蒸気船が白浜に入りました。取り寄せてくれる人がいたかもしれないですね。

ブー（苧麻／写真1・註3）もやっていたんでないかね。畑は自分の屋敷内にありました。

残された箱の中には藍染めの糸なんかありました。藍染めは覚えていませんけど、藍畑は山の中にありました。親父から「ここが藍の畑だよ。こんなんだよ。」って言われた所があるんだけれど、今、行ってみたらもう荒れていきました。山の中にりっぱに石垣が積まれてあって、藍の畑や茶畠があるんですよ。あそこだよと言われたけれど、今は何もかも生えていて分かりません。

蓑は編んでから泥に浸けました。そのままのと泥につけたのと寿命が違うらしい。色づけのためもあるらしい。

### 聞き書き 2 (新城トヨ：大正13年生／星立)

ばあちゃん（姑／新城ナヘマ）はうちが嫁に来たころ（昭和18年、新城寛好に嫁ぐ）まで、芭蕉を織っていたよ。戦前、星立て、うちのおばちゃんほど機織りする人はいない。終戦直後までですよ。82歳で亡くなりました。

ばあちゃんは地機（ジバタ／図1）でしていらした。あれからもう、地機もあまりやらなくなつて。

戦争中だったんでないかね、最後は自分が績んだ芭蕉で織って。あれが、ばあちゃんが機織した最後さ。経も緯も芭蕉だったよ。



写真1 莧麻

木綿糸があったんだよね。糸と言っても、ウタラ炭坑（註4）から持ってきて、織っていたんですよ。あれはシルケット（註5）って言っていました。芭蕉だけでは足りないって言って、縞糸に使ったりしていたんでないかね。

昔は、星立でも蚕を養っていた。春ウとか夏ウとかありました。とにかく繭はほとんど石垣にやっていた。繭から糸を取りはしたけれど、あまり上手ではないから。屑繭とかは、炊いてから布団の中に使ったさ。紡いで糸（紬のこと）にすることは教えられなかった。もう、あれから戦争だからね。

藍は「沖縄藍」とか言っていたかね。「琉球藍」とが言ったはずね。インド藍はやっていなかった。

染めるのにクール（註6）とヒルギ（註7）を使っていた。クールは赤っぽい茶色だった。クールは何かヒルギとはちょっと違う色。ヒルギはちょっと濃いな。ヒルギは網染めたり、昔の船の帆を染めたりした。フクギ（註8）とモモ（註9）も使った。フクギは黄色を染めた。黄色の濃いものは桃皮。昔はスオウの木（註10）も使っていた。染めて着てはいたが、色がね。

そうそう、うちが染めたのは、泥に埋めたさ。

15ヨミの整経するしたら、ひとヨミは40本。15ヨミは40本×15で、一幅に600本。

ばあちゃんはカシカキキー（図4）を使って整経していた。キーは糸巻くもの。

石垣に棒入れて、糊付けしたり、糸張ったり（図5）。それは、カシタビと言っていたけど。もう名前なんか分からぬ。

模様は無地じゃなかったかね。残っているはずですよ。

地機は戦前まではあったけど、戦争中なって、もう使えなくなつた。おじいさんが大工して、地機作って、ばあちゃんが織つていらした。地機の足なんか、チャーギでちゃんと作つてあったさね。

道具はもうどの家にも無いはず。戦争の時に、使つたり燃やしたり、捨てたりして。

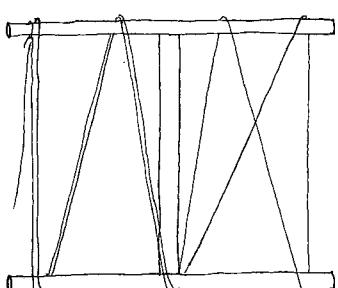


図4 工型の道具（カシカキキー・ピナシ）

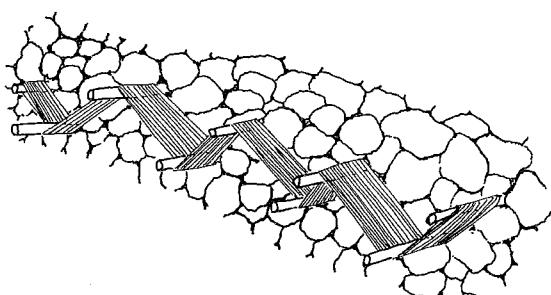


図5 糊付けで経糸を引っ張る

ばあちゃんがやっていたから道具があったの。私が来てからもやっていたからさ。これは地機と言っていた。機織りは好きではあるけど、忙しかったからさ続かなかったね。

地機と今の機（高機）と何が違うのって聞いたら、足が違う。箴とか杼とかは、買ったり作ったりした。うちは姉さんの所にあるものを使った。ばあちゃんのものはクロキだった。杼は細長くてピと言っていた。箴はブドウシ、綜続はピヤと言っていた。綜続を掛けるのをピヤカキと言うさね。

布は出来上がって布洗いした。布晒しと言って、海で洗って、また真水で流して。一回ぐらいしかしなかったんじゃなかったかね。

芭蕉の洗濯はシーカーサーです。普通の洗濯の時にさ、芭蕉はシーカーサーですると上等と言われた。

### 聞き書き 3（那根弘：明治44年生／祖納）

祖内で生まれて祖内で育ちました。戦役行って、終戦後、帰ってきたんですけどね。

母親（那根トヨ／明治20年頃の生まれ。私が24、5歳の頃亡くなる）が機織りをしていました。昭和の初め頃（昭和21、22年）までは織っていたと思います。

こちらはもう芭蕉が原材料の主なもので、その他はもう綿ですね。木綿も織っていました。木綿の畑はありませんが。芭蕉は今でも野生のものがたくさんありますからね。

それから絹、絹織りもあったですよ。蚕を飼いましてね。それで糸を取って、父親の羽織を織っていた。私の記憶では、長男までは織ってあげたと思うんです。私は三男です。

蚕は繭を育てるためのものです。石垣に送っていました（註10）。むこうに送る場合には、小包にして送っていたと思うんですが、はっきり覚えていません。大正7、8年頃のことですね。家で使う分を残して、

それで羽織などを織ったと思うんですよ。この頃は蚕を飼っていた所がたくさんありましたよ。いっぱい飼いました。蚕の糸を取る時は、座繰りでやつていました（図6）。他から教えてもらったと思うんですがね。

木綿は、那覇とか、外から仕入れてきてね。シルケットとかそういうものですね。ブーもやっていました。ええ（ブーの畑は）屋敷内ですね。（刈り取りは）2回から3回位じゃな

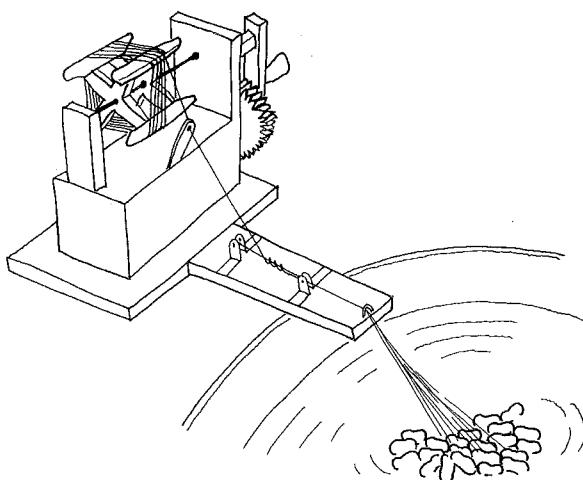


図6 座繰りによる糸取り（繭）

いでしょうかね。

芭蕉は自分で使うものは、使う分は取ってきて・・。幹の上の分と下の分は省いて、真ん中の分、そちらが非常に良いそうですよ。ひと皮ふた皮程剥いて、その次の皮がいいようですね。また、真ん中のほうはジャーワイですからね。おそらく繊維は使えない。ひと皮かふた皮か剥いで、家へ運んできて、大きなかめに適当に束ねてですね。そしてそれを薪で炊いたんですよね。その後、削ぐんですよ。その時は、包丁か竹で削いで、干して適当に乾かすんです。陰干しですね。そして適当に乾燥したときに、手で細かく、こうまた、手の爪で裂いて、それを手で、捻りながらじょうずに繋いでゆくんですね。繋いだ芭蕉は竹で作った籠に入れました。籠の名前は覚えていません。

子どもの頃だからあまり記憶していませんが、糸は竹の管に巻いていました。経糸はヤマ（糸車）で撚糸します。

もう昔はジーハタ（地機）ですからね。地機の骨組みはイヌマキだったと思います。チャーギです。堅くて長持ちして丈夫ですからね。お袋は高機までは使っていましたよ。杼の事はピーツキ。

整経は、カシカキの踊りでやっているようにしていました。

竹富、石垣と違って、こちらでは織り手が少なくなったということは、炭坑の影響があると思います。炭坑は祖納、白浜そのあたりにありました。こちらの炭坑は石炭の層がものすごく厚いそうです。個人の経営でやっていたのは、昭和13年、終戦前までありました。大正の初め、炭坑景気が出まして、機織りの難儀を考えると、まあ、炭坑に行けば、どんなりっぱなるものでも入ってきますからね。そういったこともあって、こっちの機織りが早くに途絶えたんじゃないですかね。

炭坑の販売所。あそこから、買って来るんですよね。それがもうりっぱな反物など、自分の気に入る反物などが買えましたから。金儲ければ、安く良いのが買えるということで、これで途端に機織りが下火になってしまった。食料品なども入ってきますからね。

#### 聞き書き4（那根フミ：明治41年生／祖納）

ばあさん達が使っていた機織りは地機（ジーパタ）。父の母親がやっていた。

ヤマ（糸車）は、織物するとき、糸を巻く時に使うさ。ヤマは回るでしょう。フダ（竹管）に糸巻く時に、ばあさんがよくこうしてブンブンブン回して、次は引っ張っては、ザーッと回して。この頃、子どもだから、自分でもできると思って、「させてごらん」って言ったけど、糸がもつれたり、ゆるくなったりしたら、織る時にできないからって言われたことがある。

織る時には、水か何かに浸けてから、つぎつぎにね。今日はこれだけって、水に濡らし

ておいてから、織るんですよ。

芭蕉の糸を繋ぐのは、戦前、隣組で教えてもらった。ただ、糸に出しただけで、機織りはしていない。機織りってのは自分の道具を持っていないとできないから。あるって言つても何軒しか、こういうの持っていないし。

糊浸けて広げて、石垣に引っ張るのは、今日はカシバイするって言っていたね。

#### 聞き書き 5（吉峰セツ：大正13年生／古見）

戦前は、こっちも東部といっしょですよ。うちの母方のばあちゃん（大底イントウ）なんかの時代は、ブー（苧麻）をやったり芭蕉をやったりしていた。母（吉峰オナリ：明治35年／寅年生）は、戦前、少しづつやってたんですけど、ブーや芭蕉ばっかしというのは無かったですね。シルケットとかと混せて織っていたと思います。いや、母のものでブーだけで織ったものがありますね。シルケットは白い糸で染めた糸ではない。母が織っていた頃から売っていた。

戦前にはちょっと母のものをいじってはいたけど、私自身が当時は織物をやる歳ではないのに。織物は母から習った。学校で習ったということはありません。

#### <糸について>

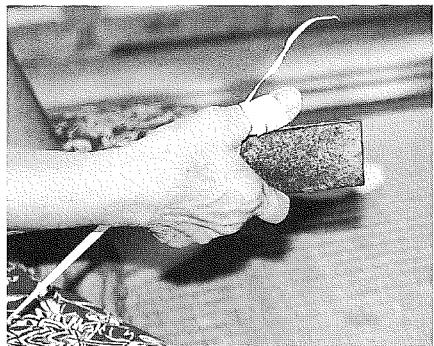


写真2 ブーピキアッカイ

糸はブーが中心ですね。あの頃、ブーは自分達で育てていないですよ。山にある山ブーを使いました。1月頃から2月、3月頃までの間に一年間のものを採っていたみたいですよ。湿気のある所に、毎年取るから、毎年生えてね。私は、ばあちゃんといっしょに採りに回っていたから分かるんですよ。開発センターあたりは、今はキビがありますが、あの時分はもう、ずっとブーがありましたよ。ゴッカラロウってあるでしょう。アカショウビンね。あれは赤いでしょう。あれが鳴くと、ブーも赤くなつてダメだって言われました。あれが鳴く時分は、3月以後ですので、「これは採らない」とばあさんが話していました。今は、ブー畠は、たいがいお家の周囲ですね。40日で採っています。ブーは苅って来て、削いで糸にします。しごく道具は今もありますよ。これはブーピキと言います。道具は、アッカイと言います。ブーピクアッカイですね。芭蕉もブーもこれでやりました。アッカイは元々は貝だった。その後、

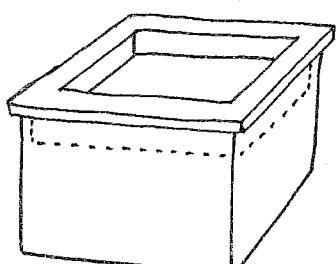


図7 スカイ

鍋の破れでやったんです。今もう、カンジャーヤーで作ってくれる。

昔はね、マニーの葉っぱを、親指に巻いて、ブーをうつむかせてチャーッとアッカイでやると、皮がスーッととれて纖維だけ残る（写真2）。これを二回ぐらいやるんです。今はマニーは巻かない。今は手袋。

纖維になると干してピス巻きする。丸く巻くのはピスと言う。

バタピキという方法があるさ。ぐるりと纖維を巻いて輪にして米の汁に浸ける。杵で白米にしたものを水に浸け、酢だちしたものにしばらくブーを浸けるんですよ。そしてトントントンとやると、白くなる。それをスクイ（図7）の蓋の上に置く。そのままだとカラカラなるので、青い葉（フツと言ふ）を乗せておいて、その後、ブーを續ぐ。スクイは四角い箱で蓋がポンと落ちるようになっている。落とし蓋のようになっている所に、今日續むぐ分を巻いて置いて、そこに葉っぱを乗せて湿らせて、續いだのはスクイに入れる。でも、たくさんバタピキを用意すると、米に湧く虫（ツヌムシ）がつくさ。

昔は芭蕉でもブーでも、糸の繋ぎは結ばない。こっちはね、こうして撫る。きれいに撫つたら抜けないよ。緯糸と経糸はやり方が違うさ。経は特に多く撫る。経は1本の糸を裂いて、一つは長く、もう一つは短くして、継いでいく。またこれが1本になって（図8／写真3）。

経糸の場合は、ヤマで撫る。緯糸はやらない。経糸はこうブンブンやるさ。

芭蕉は灰汁で炊いて纖維を取る。まず、灰汁を炊いて、そこに芭蕉をそのまま鍋に入れる。どんどん炊いて、丁度いい時に、たらい下ろす。そして、くわず芋の葉っぱで被せて、しばらく置いておく。30分以上かな。それから、こんど水で洗う。次にアッカイで纖維を取るさ。

芭蕉もブーと同じ継ぎかた。芭蕉も續だ

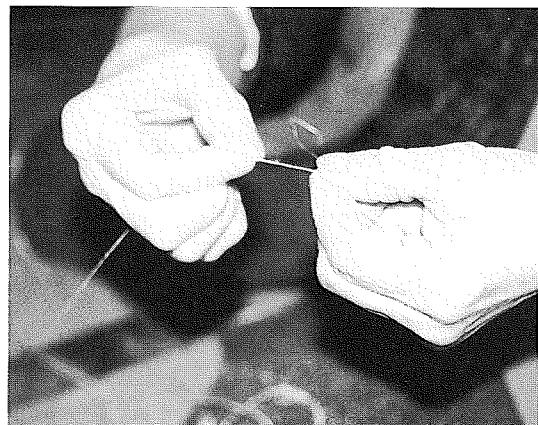


写真3 糸積み



図8 撫り繋ぎの方法

ら、スケイに入れて、経糸を一反分くらい績いで、それをブーン、ブーンって、ヤマ（糸車）で撚糸します。経にする糸と緯にする糸の績ぎは同じですけど、緯にすることは、はずれてもいいんですけど、同じ績むぎ方でも経にすることはものすごく、きれいにね、引っ張つても抜けないようね。

昔は家造りの時にね、年寄りが五、六名集まると、ブーを績がせていた。茅葺き家とか、新しい家を造る時にはね、そういう習慣があったんですよ。お年寄りがいらっしゃる時は、ブーは準備しておいて、それぞれに渡すんです。五、六人が作るので、二日か三日ぐらいで、一反分ぐらいはあるさね。

母は養蚕もしていました。あの頃はもうどの家でもやっていた。繭出しがほとんどです。竹富に持て行きました（註12）。ここには養蚕組合はない。昔の家は茅葺きで広かったからね、一番座の畳を取って、そこにね棚（養蚕棚）を作って。戦前の事ですよ。

ザクリを持ってきて、紡いだのは竹富で。糸にして一反織ったのがあるさ。



写真4 フクギ

繭はほがしたもの（蛾が出たもの）を炊いて真綿を取りました。釘を四角に打って繭を炊いて、これを引き伸ばしてね。何枚も重ねて、綿を作りました。布団やちゃんちゃんこの綿に。

（機ごしらえ）は戦前は、母が全部やっていた。巻くときに手伝いはするけれどね。

#### ＜染めについて＞

藍染めがありました。藍は二種類あった。葉が小さくて、種が豆みたいになるの（註13）と、葉っぱが大きく細長くて野菜みたいに低いもの（註14）と。豆の生るものは丈が高くなります。あれは何でしょうね。聞いたんだけど覚えていない。「トウ藍」とか「台湾藍」とか言っていたようです。藍はばあさん時代はやっていたんですけどね。葉の小さいものをよく使っていた。もう一つのものはあまりみない。母は藍の固まりを買ってきて、やっていたみたいです。

藍は葉っぱを伐ってきて、浸けて、まあ何日か置いてから、発酵しますよね。石灰を入れて。うちのばあさんが、甕にやっているのを見て、あまり女は近づくなとか言ってさ。やっぱし若い女は不淨のものと、今は近づくな言われたさ。生葉で染めるってのはしないですね。昔の家の茅葺きはちょっと軒が長いから、その軒下に置いていてやっていたけどね。

茶色はクールで染めて、黄色はフクギ（写真4）の皮。以前はウツチン（註15）もやつ

ていたけど、これはちょっと色が飛びますね。桃の皮も使います。

昔はマングローブは染物にも使った。船の帆も染めたりして。着物の糸もこれで染めた。メヒルギで皮が厚いものは染物用。皮が厚いので染まりが良い、オヒルギはね、皮が薄くて青っぽい。これは薪や物干し竿に使う。

終戦後、大和から来て、ヒルギをエキスに固めてね、内地に出していた人がいた。石垣のに住んでいて木村と言う人だった。上布の染料ではなかったですね。

シャリンバイ（註16）、フクギ、ヒルギ、クール、ヤマモモの皮。他にはあまり使わなかった。ヤマモモは薄黄色。スオウの皮も使っていた。これはクールより少し紫がかった色になる。でも、それはあまり使わなかった。

染めは、糸を濡らしあいてから染める。そして、媒染（註17）して、2、3回染めるさ。媒染は灰汁に浸けたりしました。泥にも浸けましたよ。田圃に持つていってね。こっちの田圃はよく浸かるとか、そういう風にやっていましたよ。

灰汁は、昔はカマドの灰です。たいがいガジュマル。ユウナの灰が良いと言われた。藍に使うのはね、ガジュマルの灰でしたね。

終戦後はね、イカの黒でも染めていた。色々やっていたみたい。母の頃は、ビンに入った化学のものはなかったね。

#### <織りの模様について>

戦前の模様は、経縞が多くたな。絣もやってたみたいですよ。そうね、絣入れて、色々な柄あったよ。矢絣みたいのがあったりね。タテシマ、アカシマってよく織ってたさ。経縞のタテシマ。アカシマは男の人なんかの十字の星の形の絣のもの。

絣は小かせにしてやっていたはず。私はこれはやっていない。小ガセ作りの道具は、ピナシ（図4）でやっていたんではないかなと思いますよ。カセ用の短いものがあった。

絣は芭蕉上皮があるでしょう。あれを枯らしたもので巻いて作りました。

#### <道具について>

昔は経糸を整えるものは、ピナシって言って、手がついて、長さを測ってどんどん巻いていたね。私はやったことはないけど、ばあさんなんかがやっているのを見た。大小ありました。小さいのは染めのカシを作るため。大きいのは布の経糸用。

立て掛け方式の整経台（図9）は、これは母の時代からありますね。明治の終わりぐ

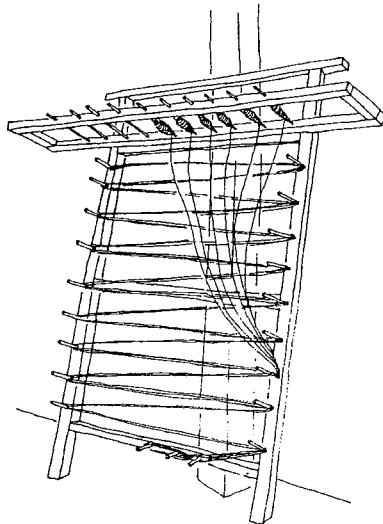


図9 框型の整経台

らいから使っていたと思いますよ。

地機はズーパタ。パタムンとも言いますね。母は上布を織るようなシマバタ（高機A／図2）を使っていた。ジーバタは小母さんがやっていた。ヤマトバタ（高機B／図3）になる前は私も使っていました。この機は（筈塚が上から）下がっているので、慣れるまで難儀でした。

母の兄嫁が竹富の人で、あの人が古見に来てから皆高機になったんです。それから地機から高機に代わったそうです。

杼はピツキ。黒木で作られた長いものでした。筈はプドゥキ。巾を張るもの、あれはバルと言う。あぜはアジ。男巻きはツブル。筈塚のことをカマタバルと言う。

継続は糸で自分で作った。ピヤと言っていました。整経してきたものに四角い箱を置く。箱には棒を入れてあって、糸を巻いてきて、終わると棒をポンってはずして。箱にね、あぜみたいに掛けてやつたらしい。

#### 註1)

- \* 「与世山親方八重山島規模帳」（乾隆33年）より芭蕉植付様之事
- \* 「翁長親方八重山規模帳」（かん豊7年）
- \* 「富川親方八重山御用布座公事帳」より  
一諸事勤之事／一諸道具之事／一御用布取納之事／一御用布調方之事／一諸御用布櫃並布丸之事／一御用布取納尺之事／一諸帳出日限之事／一勤星取立様之事／一定布ならび御用布名定之事／一御用布貫ふとき目ならび長定之事
- \* 「富川親方八重山島諸村公事帳」より  
一藍遣人之儀御用布かせ貫取調部染調方相勵候也／一布晒人之儀御用布織取次第干晒方相勵候也 一略一
- \* 「富川親方八重山島農務帳」（同治13年）  
農事手入之事／藍仕立ならび製法之事／芭蕉植付様之事
- \* 「沖縄縣八重山島統計一覽略」（明治25年／沖縄県立博物館蔵）

註2) バショウ科の多年生大型草本。イトバショウ（学名：*Musa Lukinenensis* Makino）の事

註3) 和名：カラムシ。学名：Boehmeria nivea Gaundich, f, viridula Hatusima  
方言：ブー（八重山地方）、ウー

註4) 大正8（1919）年に丸三鉱業が宇多良地区を中心に採掘させた炭坑のことか（P79  
星勲『西表島の民俗』友古堂書店 1981年2月）。

註5) シルケット加工のこと。JIS繊維用語：セルロース繊維製品をカセイソーダの濃厚

液で処理し光沢などを与える加工

- 註 6) ヤマノイモ科の蔓性多年生草本。塊根は多量の暗赤色の色素を含み、八重山上布の染料に用いられる。学名：*Dioscorea cirrhosa* Lour.
- 註 7) マングローブ林を構成するヒルギ科の植物にはオヒルギ、メヒルギ、ヤエヤマヒルギがあり、染料として使われたものはメヒルギ（ヒルギ科の常緑小高木。学名：*Kandelia candel* (L.) Druce）である。
- 註 8) オトギリソウ科の常緑小高木。  
和名：フクギ。学名：*Gracinia subelliptica* Merr
- 註 9) 楊梅。ヤマモモ科の常緑高木。学名：*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.
- 註10) 王府時代に染料として使われていたスオウは「蘇木」の文字で文献には現れる。しかし、この植物は沖縄では育ちにくく（P193 (27) 與那嶺・山田「吉濱家文書『紬關係書類』より九題」沖縄県立博物館2000年）、南方からの輸入品が使われている。  
ここで言われるスオウはサキシマスオウ（アオギリ科の常緑大高木。学名：*Heritiera littoralis* Dryand.）のことである。
- 註11) 八重山における養蚕は、1815年、栗国島から石垣善全によって蚕種と養蚕法が伝えられたことが初見と言われているが、それはうまく浸透せず自然消滅している。その後、明治27年、八重山島役所時代の勧業主任中島兼次郎が郷里の鹿児島から蚕種を取り寄せ養蚕を指導したのが八重山養蚕業再興となる。大正14年頃から昭和5年頃にかけて全盛時代を迎える。昭和6、7年頃、繭値の下落を契機に、郡農業会を発足させ、製糸会社瑞泉社に加入し普通蚕に原蚕飼育を始めたり、繭乾燥場を設置するなど働きがある（P90宮城文『八重山生活誌』昭和47年）
- 註12) 竹富島においては、明治34年、鹿児島より中座政太郎（竹富島巡査）が蚕種を持って来たのが、養蚕の始めとなる。繭のまま御倉糸工場へ販売されている（P37『沖縄民俗 第10号』琉球大学民俗研究クラブ 1965年）。
- 註13) タイワンコマツナギやナンバンコマツナギなどの植物から採れる藍のこと。インドアイの名で知られる。
- 註14) 蓼藍のことか。  
王府時代の文献資料には「唐藍」「島藍」と二種類の藍が確認される。これについて、深石隆司氏は唐藍はリュウキュウアイ、島藍は蓼藍ではないかと述べている（「島藍・唐藍考」沖縄タイムス誌 2000年1月11日～14日4回連載）。筆者も波照間調査（平成9年）の際に豆科植物による藍以外に、「トゥエー」があったことを聞いているが、琉球藍を示すものとして考察した。しかし、リュウキュウアイと

して確認してはおらず、波照間の藍も蓼である可能性もある。また、与那国調査（1988年）の際にはリュウキュウアイは育ちにくく、蓼藍は育ちやすいとの回答を得ている。

註15) 麻金。ショウガ科の多年生宿根草（学名：Curcuma Longa L.）

註16) オキナワシャリンバイ。バラ科の常緑小高木。*Rhaphiolepis indica* Lindl. var. insularis Hats.

註17) 媒染とは纖維への染料の染着を媒介することをいう。木灰はそのアルカリ成分が、田泥は鉄分が媒染剤としての役目を果たす。